

山田秀三文庫の整理作業

アイヌ語地名研究の第一人者・故山田秀三氏が遺された資料を当センターが受け入れさせていただいてから、はや8ヶ月が過ぎました。アイヌ語やアイヌ語地名に関心をお持ちの方がたなどから、「山田秀三文庫の内容はどんなものですか?」「山田秀三文庫はいつごろ公開されるのでしょうか?」といったご質問をいただくようにもなりました。

前号でもお知らせしましたように、資料全体の整理を終えて資料目録を刊行し、公開できるようにするまでには、あと二、三年を要する見込みです。それまでの間、整理の進捗に合わせて、資料の概要や整理作業の様子などを『センターだより』に連載することにしました。センターの事業や所蔵資料の一端を知っていただくことができれば幸いに思います。

今回は、比較的作業が進んできた図書資料と写真資料についての中間報告です。

《図書資料》

整理作業は、著者名、書名、発行所、発行年月日に始まって図書の痛み具合など約40の項目についてチェックし、まず所定の用紙に書き出して、さらにそれをコンピューターに入力する、という手順で行っています。3月30日現在で、約5600冊のおよそ4割にあたる2160件の入力を終えております。

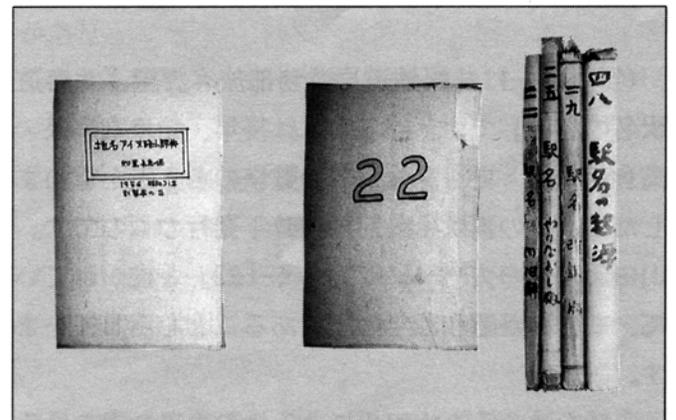
チェック項目の中で山田秀三文庫の特徴が現われているのは、書き込み、アンダーライン、図書本体やカバーの様子、などです。山田氏はしばしば文献にラインを引いたり、書き込みをしたり、付箋をはさんだりしています。本の著者から山田氏に宛てた手紙や、本に関係のある新聞記事などを挟んでいる

場合もあります。本のカバーを自作している場合も多く、そこに興味深い情報が含まれていることもあります。それらは、山田氏の学問の道筋をたどるためだけでなく、アイヌ語地名研究に重要な示唆を得る手がかりであったり、知里真志保氏ら山田氏と研究の関わりの深かった人たちの横顔をうかがい知ることのできる資料であったりもするのです。

また、これらの情報をきちんと記録しておくことで、資料を必ずもとの状態で保存することが可能になります。

* * *

これまでに登録した中にも、興味深いものや特に貴重な資料など、ここでご紹介したい図書は何冊もあります。今回は山田秀三氏と知里真志保氏の関わりを示す一冊と、アイヌ語地名研究にも意味を持つであろう一冊とを取り上げることにしました。



(写真1)

(写真2)

(写真1)は表紙の無い知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』です。山田秀三文庫の中に知里真志保氏から贈られた本は何冊かありますが、山田氏にとってこの本はふたりを密接に結びつけていた地名調査

に関わって生まれた点で格別の存在だったとみえ、知里氏を偲んで書いた文章の中で何度かこの本に触れています。それらの中から、この本の由来の説明になるであろう部分をいくつか紹介させていただきます。

「彼の著書が次から次に世に出て行った。出ると二部づつ持って来て呉れる。それが約束だった」
（「知里博士のシルエット」『政治公論』55号）

「いよいよ本ができた。彼は私のために、ぜいたくな表紙をつけた特別の本を2冊つくって贈呈したいという。いやハンドブックだろう。堅い表紙のないものが欲しいといったら、その通りに表紙のない本を作らせてくれた」（「『地名アイヌ語小辞典』と知里さん」『地名アイヌ語小辞典』1984年復刻版附録）

「その中の一冊が残っていて、今は彼の形見として机のそばに置いてある」（「知里さんと地名調査をした話」『知里真志保著作集 月報4』）

山田氏はこの本の最後の頁にも、同様のことをペンで書きこんでいます。

（写真2）は札幌鉄道局業務部旅客課編『北海道駅名の起源』です。同名の本は後年、知里真志保・高倉新一郎・更科源蔵三名の監修のもと版を重ねましたが、この本はその前の1947年発行のものです。山田氏自作のカバーには大きく「22」と書かれていて、この本が昭和22年の版であることを示しています。

表紙をめくると山田氏による次のような書き込みがあり、この本と後年の版との関係の一端をうかがうことができます。

「本版は余りに誤記多く……本冊に赤ボールペンで訂正してあるのは知里真志保さんが書込んだものの寫し。昭和二十五年版はその思想で改版されていることが、対照すると歴然としている」

確かに、この本の中には赤ボールペンの書き込み

がたくさんあります。

* * *

古い本を段ボール箱から取り出して掃除し整理する作業は単調で、文字どおり「埃まみれ」です。山田氏の教養の広さを物語るのでしょうか、言語学の専門書からヨーロッパや中国の古典のシリーズなどもたくさんあって、データの入力も一筋縄ではかきません。それでも、時に思わぬ情報と出会えることを期待しながら次の段ボール箱を開ける瞬間は、ちょっとした楽しみなひとときでもあります。

(M・O)



山田氏は色彩豊かな自筆のイラスト入り年賀状を親しい人におくっている。平成4年が最後となった。

《写真資料》

「山田秀三文庫」の写真資料は段ボール箱5箱（箱は430×300×300ミリ）で当センターに納められました。写真資料は第1段階の整理作業として次のように行いました。基本的には段ボールごとに作業します。

この時点では資料が他の箱と関連のある資料であっても他の箱に移すことはしません。また、山田秀三氏が現像・焼き付けの後、写真屋さんの封筒・お菓

子の空き箱などを利用して整理する際に、撮影年月日・撮影場所・人物のメモなどを記録しています。その内容についてチェックして記録しながら箱ごとの番号とメモ内容や封筒ごとに分類しながら枝番号を付けます。この段階では大まかな整理ですから、ネガの本数やコマ数もわかりません。写真撮影場所や年月日を特定できないものがあります。また、焼き付けも他のネガの焼き付けが混じったものでも、どこにあったのかを後々でも判明するように、そのままの番号で枝番号を付けておきます。この段階までの整理は昨年末までに終わりました。

そこで、現在は第2段階としてそれぞれ番号を付けた封筒の内容を整理しています。番号は箱番号・分類番号・分類枝番号の3種類、それに撮影場所のデータとして、その分類番号ごとに写真の撮影された場所の代表的な都道府県名(北海道内は市町村名)さらに市町村名(北海道内は市町村の字名)を記録し、白黒・カラーや35ミリ・ハーフ・110などネガの種類、ネガのコマ数、焼き付け数を記録し、さらに山田秀三氏の記入メモなどを記録し、整理者が判断できることはさらに別項目として記録します。

この段階ではネガごとに分類が進むようにしましたので、作業が進むにつれてネガ本数やコマ数、焼き付け数が判明してきてます。また、焼き付けた写真は、別に保管されている地図やフィールドノートと密接な関連があります。ネガと一緒に残された焼き付け写真はフィールドノートに張り付けたり、刊行物に使用した残りのようです。

この作業が5箱のうち3箱までは終了し4箱目にとりかかっているところです。3箱までではフィルム本数は白黒・カラーともに約150本づつ、コマ数では白黒約2,200、カラー約3,800コマあることは確認ができました。しかし、現在整理中の箱は多数の写真があることがわかっていますので、大幅にふえることと思います。総数では確実に1万コマを超える数になることが予想されます。

山田秀三氏は自ら撮影したフィルムは写真屋の封筒や現像後に納められるネガケースに「宮城県北部 I」「秋田県南部」「知床」などと大きな地域名で撮影場所と「30.5.1」「昭和29.8.15 16」などと元号で撮影年月日が記入してありますので、その二点については特定できるものもあります。また、「(B)参照」や「Konilet」などと他にフィルムがあることの確認できるメモや使用カメラ機種名などを記載していることもあります。しかし、撮影地域のどこの何というアイヌ語地名に関連した写真であるかは焼き付けの裏面のメモや、今後整理作業を行うフィールドノートの整理が進まなければ判明しません。

現在、判明しているもっとも古い地名関係写真は昭和28年に月形郡浦臼町で撮影したもので「札比内、浦臼内、黄臼内 28.9」とネガケースの蓋になるところにメモがあります。後年、北海道と東北地方のアイヌ語地名と比較で使われる地名に昭和28年に注目していたことがわかります。また、このネガケースには、自分でさらに再整理をおこなった時のメモがあり

	札比内	
「北海道	浦臼内	10
	黄臼内	28年9月

と書かれています。

この作業の終了後はさらに一コマごとのデータを記録したデータベースにしていきます。

たくさんの写真と、当たり前のことですが著作の挿図の説明と同じ字で書かれたメモを見ていると、山田秀三氏が地名研究にかけた時間とお金、それにもまして情熱のすごさを改めて感じています。

(T・K)

クキマテク

〈ku=kimatek 私はあせった〉

センターだより創刊号の「フィールドだより」の項目に副題として《コタン オロワ クヌ》と書いてみたが、はたしてこの表現でよいのか、刷り上がった後に気になってしまった。これは、「村で私が聞いた」の意味で書いたつもりだが、アイヌ語で「～に」「～で」と場所を表現するときの言葉は他にもある。

タ ta「～に、～で」や ウン un「～に、～へ、～の方で」という言葉（助詞）に、オロ or「所、中」あるいは オロ oro「～の所、～の中」という言葉（名詞）をつけた形、つけない形などと、いろいろな組み合わせがあって、アイヌ語作文の時に、どれを選ぶか迷う人も多いのではないだろうか。

コタン kotan「村」に タ ta「～で」をつなげれば「村・で」ということで、すみそうなものだ。けれども コタン kotan の場合は、そう簡単にいかない。（ここでは詳しく述べるスペースがないので、興味のある方は、中川裕（1984）「アイヌ語の名詞と場所表現」『東京大学言語学論集'84』を参照するか、当センター大谷までお問い合わせください）

コタンと私の関係をもう一度振り返ってみた。私が作文したときの状況は、「札幌に住んでる私が、1ヶ月程前に他の町へ行って聞いてきた」ということで、「村の所から、私は聞いた」とアイヌ語にしやすと思われる日本語におきかえてから単語を当てはめただけだった。

単語だけ眺めていてももちが明かないので、過去のテキストの中から、私と同じような オロワ orwa「～所から」の使い方をしている例をさがした。もし無ければ、私は嘘を書いたことになる。研究者生命を少しかけて、ドキドキしながら見たところ、だいたい文章を受け身にする働きをしているか、時間的な接続の表現として、「それから」「その時か

ら」の意味になっているのであった。私と似た状況での言い回しは、あるにはあったがわずかしかない。この場合に場所を表すときは、普通 オッタ or ta や オルン orun らしい。

アイヌ語と日本語の「てにをは」（助詞）は一致していないから、アイヌ語で作文するときはアイヌの価値観や文法を損なわないよう十分な注意をはらって選定しなければならない。さらに英語やスペイン語などへの翻訳となると、日本語以上に文化背景が違うから難しさは増すのである。この点を理解せずにアイヌ語を使うと、ゆがんだアイヌ語が普及する恐れがある。

考えた末に、現在のアイヌ語話者がどんな表現をするか尋ねてみた。アヌンコタン ワ クヌ ワ ケッ anun kotan wa ku=nu wa k=ek「よその村から私は聞いて来た」の意味で、昔ながらに使っていたと言われる。この時の ワ wa「～から」の用法は、私の表現法と、ほぼ同じとあってよいと思う。

ちょっとびり安心したが、創刊号のフィールドだよりには、明らかな誤記がひとつあるので訂正したい。タラ tar と書いたのは、タラ tara である。前者は「背負い紐」、後者は「俵」であり、カタカナ表記は字の大きさ、ローマ字表記なら母音のあるなしで意味が違ってくる。きちんと歌えるのに文字化を誤ることもあれば、アイヌ語で書くことができてもアクセントの規則がわからないために発声するのが恥ずかしくマゴマゴすることもある。（ローマ字音素表記を理解すると、原則を覚えやすい）

何か難しそうなことばかり言っているが、辞書等の確認を怠ってアイヌ語を使ったことを、私は深く反省しています。

オロワ orowa「そこから」、正確な情報を提供する「アイヌ民族文化研究センター」をめざして、しっかりやっていきたいと思います。

（大谷 洋一）

『シコッタ ウエピリカレ』に参加して

3月21日、千歳文化センターホールにおいて『シコッタ ウエピリカレ（ちとせでおたがいたかめあいましょう）』が開催され、千歳アイヌ語教室のアイヌ語劇「クンネカタッ レタッカタッ（黒い糸玉 白い糸玉）」が上演された。かねてからその猛練習ぶりについては耳にしていたが、まさかあれほどとは思っていなかったくらい素晴らしい出来映えだった。なかでも、劇の初めに日本語であらすじを語り、最後にまた日本語でまとめるというナレーターの配置には注目させられた。こうすることでアイヌ語だけの部分でも、観客はストーリーを頭に入れた上でアイヌ語の響きや演技そのものを楽しむことができる。

実は、アイヌ語劇中にどのように日本語訳を位置づけるかというのは結構頭を悩ませる問題である。観客にアイヌ語の世界にタイムスリップしたような感覚を味わってもらうためには日本語など交えない方がいい。しかしオペラや歌舞伎ともなれば、全くことばの意味がわからなくても芸術性や舞台装置の見事さだけで観客を惹き付けることもできるのだろうが、残念ながらまだそこまでの域には達していない各教室のアイヌ語劇において、日本語訳をつけてほしいという声が起こるのは、ある程度やむをえないことだろう。

しかし、手元に配布された資料や脇のOHPスクリーンに映し出された日本語訳に頼ると、観客の目は舞台に集中しなくなる。かといって同一人物がアイヌ語のセリフの直後に日本語訳をつけてしまえば、せっかくのアイヌ語がかすんでしまう。そこで最近では日本語訳を別の人物に語らせることが多いようだが、その際も語り手がソデに隠れたり、わざとアイヌの民族衣装をつけないで舞台に立ったり、さまざまな工夫が凝らされてきた。その意味で今回の千歳の劇は、また一つの新たな可能性を示してくれたよ

うに思う。

いずれにせよ、「劇の旭川」の異名をとる旭川アイヌ語教室をはじめ各教室がさまざまなアイヌ語劇に取り組んできている。独創性と楽しさを基本としたアイヌ語劇は、アイヌ語学習に新しい活力をもたらしつつあるようだ。

（米田 優子）

イトツパ（男が受け継ぐ先祖代々の印）

以前から祖母の家にあるチセイノウ（家の守り神のイノウ）が気になっているが、手に取って印されたイトツパを見ることが許されるのは一族の男性に限られている。

先日祖母を訪ね、イトツパについて聞いてみると、いつものように「ここにあるよ。」とだけ言った。女性がチセイノウを見たり触れたりしても良いのだろうかと尋ねると、何も言わず私をじっと見つめた。もう一度聞くと今度はうつむいたまま「いいよ、今はシリチャンだから…（昔のように規則が厳しくないから）」と小さな声で言った。

古くからの伝統・風習を学び、伝承する時、儀礼や神事に関するタブー（禁忌）は決して少なくないと思う。家族だけが伝承するものもあり、女性あるいは男性であるが故に入り込めない領域もある。

結局、イノウを遠くから眺めただけの私に、祖母はイトツパにまつわるウチャシコマ（言い伝え）を語って聞かせてくれた。

（沢井 春美）

註：現在、十勝ではイトツパ itoppa と発音する人もいるという。

1994年度の動き

平成6年度、当センターの各種事業や協力した主な行事等について列記しました。

当センターの正式名称は17文字を用いる長いものなので、ここでは「センター」と略称を使います。ご了承ください。

- 6月
 - ・センター開設（1日）
 - ・センター開所式・祝賀会（13日）
- 7月
 - ・第一回アイヌ民族文化研究に関する道立施設連絡会議
 - ・「山田秀三文庫」贈呈式（15日）
- 8月
 - ・第一回センター運営協議会
- 9月
 - ・北海道ウタリ協会主催 特別展「ピッカノカ」解説文のアイヌ語翻訳等の協力
 - ・センター主催「第1回アイヌ文化講演会」
「受け継ぐ民族の心」 秋辺 得平氏
(社団法人北海道ウタリ協会理事)
 - 「山田秀三とアイヌ語地名」萩中 美枝氏
(札幌大学講師)
 - ・第二回アイヌ民族文化研究に関する道立施設連絡会議
- 10月
 - ・国立歴史民俗博物館展示用VTR作成協力
 - ・『センターだより第1号』発行
- 11月
 - ・日本言語学会（報告：大谷）
- 12月
 - ・第二回センター運営協議会
 - ・北海道教育大学集中講義（講師：甲地）
 - ・「山田秀三文庫」音声資料保存処理
- 1月
 - ・北海道教育大学集中講義（講師：甲地）
 - ・北海道ウタリ協会主催「アイヌ民族文化祭」に協力（解説員、記録係を派遣）
- 2月
 - ・「山田秀三文庫」音声資料保存処理
- 3月
 - ・第三回センター運営協議会
 - ・『センター研究紀要第1号』発行
 - ・『センターだより第2号』発行

★お知らせ★

『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第1号』（B5版 本文159頁）が、1995年3月30日付で刊行されました。以下にテーマと執筆者を目次順に紹介します。

- ◇論文 アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点—穀物の起源説話に関する検討を中心に—
米田 優子
- ◇調査報告 松島トミの伝承 大谷 洋一
- ◇調査報告 沢井トメノさんが語るツッポクシペツ” cuppokkuset”
沢井 春美
- ◇論文 アイヌ古式舞踊伝承団体のレパートリーにおける歌をめぐる一国の重要無形民俗文化財の追加指定を受けた9団体の歌の記録追補—
甲地 利恵
- ◇研究ノート 第二次世界大戦期における「戦勝祈願」のカムイノミをめぐる 小川 正人
- ◇論文 アイヌ語静内方言の接続助詞 奥田 統己

主な配付先・国立・私立の大学、博物館、研究機関
・都道府県の主要図書館
・北海道ウタリ協会及びアイヌ無形文化伝承保存会、アイヌ語教室

編集後記

◆今回は「山田秀三文庫」の中から、文献・写真資料についての整理の進捗状況を報告しました。次回は音声・映像資料の予定です。アイヌ文化について、お気づきの点、ご意見、ご要望等をお寄せください。

編集・発行 **北海道立アイヌ民族文化研究センター**
〒060 北海道札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1-7 5階
Tel 011-272-8801(代) Fax 011-272-8850
開館/月～金 9:00～17:00 休館/土・日・祝